

中国人日本語学習者によく見られるアクセントの問題点

尤 東旭

0. はじめに

日本語学習において正しい日本語のアクセントを習得することが非常に重要なことである。日本語において、単語のアクセントが高い、あるいは低いという2種類しかない高低式アクセントが、それに比べ、中国語は一つの発音に対して平声（第一声）、上声（第二声）、去声（第三声）、入声（第四声）の四つあるアクセントがあり、いわゆる四声であるが、実際はこのほか軽く発音する「轻声」があって全部で五つのアクセントがある。日本語の平らかな高低型のアクセントに対して、中国語は抑揚のある強弱型のアクセントである。日本語は一つの単語の中にアクセント高点の山が一つしかないが、中国語は二つ以上あってもよい。中国人日本語学習者が持っているこのような母国語のアクセントは日本語の正しいアクセントの習得には影響を与え、じゃまする場合が多く、中国人学習者の独特のくせになっている。そのために、中国の日本語教育にたずさわっている教師はアクセントを重視する意識がかなり高い。磯村一弘氏（2001）の報告によると、中国では学生にアクセントを「教えている」と答えた日本語教師が9割近くあり、ほかの国よりはるかに多いという。実際、中国人日本語学習者の日本語アクセントの習得状況と問題点を調べるために、本センターの中級レベルクラスで勉強中の中国人学習者を対象に、アンケート調査を2回行った。2回とも4人に参加してもらい、合計6人、のべ8人に対して調査を行い、中国人学習者によく見られるアクセントに関する問題点について考察したのである。

1. アクセントの変化がある形容詞について

日本語の中高型の3音節形容詞は連用形と過去形の時に頭高型のアクセントに変わることになっている。たとえば、「うまい」は、「う^まい」、「う^まくて」、「う^まかった」というようにアクセントが変化する。これを習得するかどうかを調べるために、次のように10語を選んだ。

うまい ^{から}辛い くさい こわい ^{しろ}白い ^{せま}狭い ^{ちか}近い ^{なが}長い ^{にが}苦い ^{わる}悪い

これらの形容詞の基本形、連用形、過去形の順番にならべた調査用紙を読んでもらい、アクセントについての聞き取り調査を行ったのである。その結果は表1の通りである。

表1の一番上にある学習歴は学習者が中国での日本語学習年数を指すものである。一番下にある欄は項目別回答の小計のである。その欄内には左側の数字は不正解数で、右側は正解数である。4人全員は3音節形容詞の基本形のアクセントを全部正しく読めた。しかし、連用形の正解率は低くて、半数を占める2人はゼロである。過去形は全員ともゼロの結果である。つまり、半数くらいの日本語学習者は「う^まい」というアクセントだけを知って、それ

で類推して「うま¹くて」、「うま¹かった」と読んでしまうと考えられる。今回は調査をしなかったが、仮定形の「うま¹ければ」はおそらく同じように「うま¹ければ」ではなく、「うま²ければ」と読むだろうと推測できる。

表1 3音節形容詞のアクセントの習得状況

学習歴	1年			1年			1.5年			2.5年		
	基本	連用	過去	基本	連用	過去	基本	連用	過去	基本	連用	過去
うまい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	○	○
からい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	○	○
くさい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×
こわい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×
しろい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×
せまい	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×
ちかい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×
ながい	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×
にくい	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×
わるい	○	×	×	○	○	×	○	×	×	○	×	×
小計	0/10	10/0	10/0	0/10	3/7	10/0	0/10	10/0	10/0	0/10	2/8	2/8

解決策としては、a. 3音節中高型形容詞のアクセント変化法則を説明し、そのパターンを覚えさせることである。b. 3音節の中高型の形容詞は数それほど多くないので、付録1にあげたものはほとんど全部である。学習者にそれを全部覚えさせること。また、このような形容詞から派生語が生まれる場合、たとえば「あ¹おい」からは「あ¹お」ではなく、必ず「あ²お」と読み、「あ¹おい」に「さ」がつく場合「あ¹おさ」ではなく、必ず「あ²おさ」のように頭高型の読みになるという法則を教えることである。

2. アクセントの変化がある動詞について

日本語の動詞は活用形によってアクセントがいろいろ変わるものがある。動詞のアクセント変化のパターンは大まかに次の三つに分けることができる。

2. 1 アクセントの変化の少ない動詞

表2 2音節動詞のアクセントの習得状況

学習歴	1.5年		2年		2.5年		5年	
	基本形	連用形	基本形	連用形	基本形	連用形	基本形	連用形
開く	×	○	○	○	×	○	○	○
聞く	○	○	○	○	○	○	○	○
行く	○	○	○	○	○	○	○	○
居る	×	○	○	○	○	○	○	○
言う	×	○	○	○	○	○	○	○
生む	○	○	○	○	○	○	○	○
置く	×	○	○	○	×	○	×	○
押す	×	○	○	○	×	○	○	○
書く	○	○	○	○	○	○	○	○
咲く	×	○	○	○	×	○	○	○
刺す	○	○	×	○	○	○	○	○
問う	×	○	×	○	×	○	○	○
這う	○	○	×	○	○	○	○	○
履く	×	○	○	○	○	○	○	○
拭く	×	○	○	○	×	○	×	○
踏む	×	○	×	○	×	○	×	○
降る	○	○	×	○	○	○	○	○
巻く	×	○	○	○	×	○	○	○
持つ	○	○	×	○	○	○	○	○
揉む	○	○	×	○	○	○	○	○
焼く	×	○	○	○	×	○	○	○
やる	×	○	○	○	○	○	○	○
酔う	○	○	○	○	○	○	○	○
小計	13/10	0/23	7/16	0/23	9/14	0/23	3/20	0/23

平板型、尾高型の動詞はアクセントの変化の少ない。その活用形のアクセントは基本形とあまり変わらないものである。たとえば、「おくる」のように、活用形は「お^くって」、「お^くれば」、「お^くります」全部平板型のアクセントである。このような動詞の数は、アクセント変化のパターンが基本形から類推できるので、学習者にとってはむずかしいものではない。しかし、実際、このような平板型のアクセントを頭高型に間違えることがよくある。表2の一番上の欄にある学習歴5年の対象者だけは中国で日本語を習ったのではなく、日本に5年間滞在中に日本語を自学したそうである。それ以外の対象者の学習歴は全部中国での学習年数を指すものである。表2に示したアンケートの結果のように、動詞23語のうちに8語が頭高型で、15語が平板型と尾高型である。その15語の中では、全員正解したのは「聞く」、「行く」だけである。不正解は13語、25例である。「問う」のように全員間違ってしまったものもあった。中国人学習者は発音上の習慣では2音節の語彙を頭高型に読む傾向が強いようである。特に初心者は「する」を「^する」に、「やる」を「^やる」に「いく」を「^いく」のように間違えて読むことが多く、なかなか直りにくいせの一つである。このように、平板型、尾高型の動詞について、頭高型に間違えないように、学習者に基本形のアクセントをしっかりと覚えてもらう工夫や訓練が必要である。

2. 2 アクセントの変化がある頭高型の3音節動詞。

頭高型の動詞の基本形は、「ます」のつく連用形と、「ない」のつく否定形とはアクセントが違うのである。たとえば、「かえる（帰る）」は「か^えって」「か^えった」「か^えれば」「か^えろ」のように、アクセントが変わらないが、「か^えります」「か^えらない」の時にアクセントが中高型に変化する。このような頭高型の3音節動詞は「帰る」、「かえす」、「はいる」くらいで、数が非常に少ないが、表3に示したように、4人のうち3人は基本形の頭高型のアクセントを平板型に間違えて、基本形の正しいアクセントの習得率は大変低い。その原因は次のように考えられる。今の日本語教育は動詞を基本形から教えるのではなく、「ます」のつく連用形から教えることが多い。そのため、学習者は最初に覚えるのは「か^えります」というアクセントである。いったん覚えたアクセントのパターンではほかの活用形のアクセントを類推して、「か^える」、「か^えって」、「か^えれば」、「か^えろ」のように間違えてしまうからである。このような基本形がほかの活用形と大きく変わる動詞に対しては、基本形とその活用形のアクセントを対比しながら両方を覚えてもらうように工夫をする必要がある。

表3 頭高型3音節五段動詞のアクセントの習得状況

学習歴	1年			1年			1.5年			2.5年		
	基本	連用	過去	基本	連用	過去	基本	連用	過去	基本	連用	過去
帰る	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
入る	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	○	○
正解数	1	2	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1

2. 3 中高校3音節の一段動詞。

3音節中高校の一段動詞はアクセントが以下のように規律正しく変化する。たとえば「たべ^レる」は「たべ^レて」、「たべ^レた」、「たべ^レます」、「たべ^レよう」のように連用形、過去形、推量形の際はアクセントが中高校から頭高型に変わる。「たべ^レない」「たべ^レれば」「たべ^レろ」のように、否定形、仮定形、命令形の際はアクセントが変わらない。日本語学習者がもっともよく接触するチャンスの多い「動詞+ます」のアクセントはそれと同じ中高校であるため、基本形のアクセントから類推して読むのは多い。そのために、動詞活用形のアクセントの変化にはなかなか気がつかないのは、現状のようである。これについての調査結果は表4の通りである。

表4 頭高型3音節一段動詞のアクセントの習得状況

学習歴	1年			1.5年			2.5年			5年		
	連用	過去	ます	連用	過去	ます	連用	過去	ます	連用	過去	ます
見える	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○
見せる	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○
晴れる	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○
できる	×	×	○	×	×	○	×	×	○	×	×	○
受ける	×	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○
生きる	×	×	○	×	×	○	○	○	○	○	○	○
閉める	×	×	○	×	×	○	×	×	○	○	○	○
食べる	×	×	○	×	×	○	○	○	○	×	×	○
正解数	0	0	8	1	1	8	2	2	8	3	3	8

この調査は「見える」、「見えて」、「見えた」、「見えます」のように上記の動詞8語を読んでもらい、行った聞き取り調査である。「基本形」と「+ます」のアクセントは全員正解であるが、紙面の都合で基本形の欄を省略したのである。その基本形のアクセントは前記の2音節の動詞と違って、頭高型に間違えることがまったくないのである。いったいなぜこうなるのだろうか。これは中国人が3音節の語を発音する場合、頭高型より、中高校や尾高型が自分の発音の習慣に合っているからである。たとえば、中国人学習者がよく「ド^ラマ」を「ド^ラマ」、「か^らす」を「か^らす」と呼ぶのはこのためだと考えられる。また、いまの日本語教育は動詞をほとんど「～ます」を中心に教えているから、「～ます」のアクセントが全員正解になる要因だと考えられる。しかし、一方頭高型のアクセントに変わる「連用形+て」と「過去形+た」の正解率は非常に低い。学習歴の長い方は正解数が少し増えたが、それほど目立つものではない。成人になる外国人にとって、日本語のアクセントの自然習得は難しい

ことで、このような動詞活用形のアクセントの変化を学習段階で指導しなければ、自分ではなかなか気がつかないと考えられる。付録2のように3音節の中高型一段動詞をまとめて教えて、練習する必要があると思う。

3. 名詞のアクセントについて

名詞は形容詞や動詞と違って、活用形がないが、各品詞の中では名詞の数が一番多いので、そのアクセントを正確にマスターすることが容易なことではない。一口名詞といってもその幅が広すぎるから、中国人学習者によく間違っている以下の三つに絞って、考察したのである。

3. 1 2音節名詞のアクセント

中国人日本語学習者にとって、2音節の名詞はけっこう問題がある。2音節の名詞には、おもに最初の音の高い頭高型のアクセントと2番目の音の高い尾高型のものがある。本稿では、名詞の後ろに助詞がつく時のアクセントの変化にふれないので、第2音節まで高いものと後ろにつく助詞まで高くなるものを同じように取り扱い、尾高型という。調査する語彙は次の27語である。そのうち、頭高型の語が6語で、尾高型の語が21語である。

^{あめ}雨 ^{あじ}味 ^{あし}足 ^{いえ}家 ^{おい}甥 ^{おの}斧 ^{おに}鬼 ^{おや}親 ^{かげ}影 ^{かた}肩 ^{けが}怪我 ^{くに}国 ^{こし}腰 ^{ゆめ}夢
^{しも}霜 ^{とみ}富 ^{なぞ}謎 ^{つや}艶 ^{つゆ}梅雨 ^{はじ}恥 ^{はら}腹 ^{みね}船 ^{ほし}星 ^{みち}道 ^{むし}虫 ^{やま}山 ^{もり}森

表5 2音節名詞のアクセントの習得状況

学習歴	1年	2年	2.5年	5年
頭高型正解数	6	2	1	2
尾高型正解数	13	18	17	19
正解数小計	19	20	18	21

2音節の名詞のアクセント調査結果は表5の通りである。全員のレベルはほぼ同じで、特徴として、学習年数と正解率との差はほとんどないことである。頭高型の語について、全員が正解を出したのは^{あめ}雨の1語だけである。尾高型について、^{あし}足、^{いえ}家、^{くに}国、^{こし}腰、^{つゆ}梅雨、^{みち}道、^{むし}虫、^{もり}森の8語は全員正解であった。このように、ふだんよく使われる語はアクセントの正解率も高いようである。しかし、全体から見ると、27語のうちに正解したのは平均20語前後で、間違ったアクセントがその四分の一弱を占める。その中には、頭高型を尾高型と間違えた語が多いようである。2音節名詞のアクセントの習得は、頭高型と尾高型との区別であると思う。

3. 2 漢字一文字のアクセント

日本語においては、一文字の漢字のアクセントを見てみると、ほとんど頭高型と尾高型の

2種類しかない。しかし、中国語においては、四声を考えると少なくとも日本語の4倍になる。中国人が日本語を習う場合、中国語のアクセントが日本語の漢字アクセントに影響を与えやすいと思われる。日本では漢字一文字を音読みにする場合、頭高型のアクセントが多い。日本語の頭高型のアクセントは中国語の四声の第四声に近いが、第一、第二、第三声のアクセントと一致しない。特に中国人の名字を日本語で、音読みにする場合、たとえば劉さん(りゅうさん)、郭さん(かくさん)、趙さん(ちょうさん)、李さん(りさん)のように、日本語では全部頭高型のアクセントである。しかし、中国語の読みは劉(liú)郭(guō)趙(zhào)李(lǐ)で、アクセントがそれぞれ違うので、初心者是中国語と発音の近い劉、李などのようなアクセントを中国式のアクセントで読む場合が多い。また、中級レベルの学習者にとって中国語が日本語の漢字アクセントに影響を与えるかどうかについて、中国人の苗字に使われる漢字に対してアンケートを行った。

表6 漢字一文字のアクセントの習得状況

学習歴	1年	2年	2.5年	5年
郭 guō	かく	かく	かく	かく
薛 xuē	せつ	せつ	せつ	せつ
楊 yáng	よう	よう	よう	よう
姚 yào	よう	よう	よう	よう
蔣 jiàng	しょう	しょう	しょう	しょう
陸 lù	りく	りく	りく	りく
邵 shào	しょう	しょう	しょう	しょう
正解数	5	3	6	5

苗字に使われる漢字はいつも呼ばれているので、強いインパクトがあり、覚えやすいと思われる。表6にある漢字はアンケートを受ける対象者苗字以外のものである。「薛」という苗字は少ないため、耳にするチャンスもあまり少ないであろう。しかも、中国語「xuē」の四声は平らかな一声であるため、全員は尾高型の読み間違ってしまったのである。同じ一声の「郭」は数が多いので、そのアクセントを自然に覚えてしまう。また、「楊」、「姚」のような苗字は接触するチャンスが多いため、全員は正解になるのである。「陸」は尾高型のアクセントが正しいが、さん付けや君付けにして呼ぶ時、アクセントが頭高型に変わる。頭高型の「邵」は中国語のアクセントに近いが、間違ってしまう人もいる。今回数の少ない人名用漢字だけを使い、調査をした。その結果を見ると、中国語の四声と日本語のアクセントの違う漢字について中国人中級学習者は母国語からのアクセント干渉はそれほど強くないようであるが、今後語数を増やしてさらに調査する必要がある。

3. 3 複合名詞

単語のアクセントの変化に気がつかない傾向がある。日本語は一つの単語の中にはアクセントの高点が一つしかない。また、「高低低・・」、「低高高・・」のように、単語の最初から、高の場合次はかならず低になり、逆に最初は低の時、2番目は高にならなければならない。つまり「高高低・・」、あるいは「低低高・・」のように、単語の頭から「高」あるいは「低」が二つ以上連続することは絶対あり得ない。しかし、中国語では一つ一つの母音にそれぞれのアクセントがついていて、その集まりで単語になる。そのため、単語の前に接頭語「お」のつく場合、アクセントがおかしくなることは中国人学習者にはよく見られる現象である。たとえば、「さしみ」(刺身)は「お」がつかない場合、「おさしみ」と読むのではなく、「おさしみ」と読む人が多い。日本語では単語の一番目のアクセントは2番目のとかならず違うから、日本人はこのような場合、自然にアクセントを前へずらして変化させる。しかし、中国人は最初に習った単語のアクセントにとらわれてしまい、後に接頭語がついてもアクセントがもとのままにとどまり、変化しないので、非常に不自然なアクセントとなるわけである。これについての調査結果は表7の通りである。

表7 接頭語「お」のつく語のアクセント

学習歴	1年	2年	2.5年	5年
お 刺 身	おさしみ	おさしみ	おさしみ	おさしみ
お 魚	おさかな	おさかな	おさかな	おさかな
お 見 舞 い	おみまい	おみまい	おみまい	おみまい
お 醬 油	おしょうゆ	おしょうゆ	おしょうゆ	おしょうゆ
お 妹 さん	おいもうとさん	おいもうとさん	おいもうとさん	おいもうとさん
正 解 数	0	1	1	0

表7に示したように、接頭語の「お」のつく語の正解率は驚くほど低いことが分かった。また、ほかの単語と違って、正解率は学習年数とあまり関係がないようである。調査の結果に示したように、接頭語「お」のつく場合、もとの語のアクセントは前へずれる変化には、中国人学習者は容易に気がつかないのである。

また、同じように、日本語では二つの単語が一つの単語になる場合、二つの単語のアクセントが必ず融合して一つの山にならなければならない。たとえば、「テレビ+にいがた=テレビにいがた」となる。中国人学習者はこのような変化に気がつかず、「テレビにいがた」のように、アクセントの融合をさせずに単純に単語と単語をくっつけただけで、一つの単語の中には二つの山ができて不自然なアクセントになったのである。したがって、ふだんの授業の中で、教師はこれらの問題点に指摘し、学習者に気づかせるべきである。

4 ま と め

前記のように、中国の日本語教育ではアクセントがかなり重視されているそうであるが、以上の考察を通じて、中級レベルの中国人学習者にはアクセントの問題がまだまだたくさんあることが分かる。中国では日本語を1、2年間勉強して、アクセントをある程度習得したと思われる。しかし、アンケート調査に示したように、まだまだ不十分のようである。

それを解決するには、まず、学習者にアクセントに気をつける意識を持たせなければならないことである。成人になった学習者は、ふつう発音や文法に集中しすぎるため、アクセントには気がつかず、くせになったところはなかなか直らないのは現状である。中国語の辞書には全部アクセントの四声がついている。英語の辞書にもアクセントが全部ついている。しかし、日本語では『新明解国語辞典』以外にアクセントを表記する国語辞書はほとんどない。テキストにもアクセントを表記するものはあまりない。教師は授業中正しいアクセントと間違ったアクセントの区別をきちんと説明し、学習者がそれを聞いて分かるように訓練して、アクセントの意識を高めなければならない。

次に、動詞の基本型のアクセントを学習者にしっかり習得させなければならないことである。いま、日本語教育においてはほとんど「動詞+ます」の形で教えているから、学習者が頭高型動詞の基本形のアクセントを習得する状況はアンケート調査に示したようにあまりよくない。改善方法として、頭高型動詞に対して、「+ます」と同時に「基本形」も教えて、「基本形」と「+ます」のアクセントの違いを認識させて、正しいアクセントを覚えてもらうことである。

最後に、活用形によってアクセントが変化する形容詞、動詞に対して、特別に対処する必要がある。アンケート調査の結果に示したように、学習者は形容詞、動詞活用形のアクセント変化にはほとんど気がつかないから習得率が低い。そのため、活用形によってアクセントが変化される形容詞、動詞の規則を説明し、それらの形容詞、動詞をまとめて教えて、練習する工夫が必要である。

参考文献：

磯村一弘 海外における日本語アクセント教育の現状 (2001) 『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

金田一春彦監修 秋永一枝 (1981) 『明解日本語アクセント辞典』第二版 三省堂

松崎寛・築地伸美・串田真知子・河野俊之 (1999) プロソディグラフを用いた日本語音声教育－韻律指導用カリキュラムについて－ 1999.9.18 第1回日本語音声教育方法研究会資料

大坪一夫監修、王伸子・シリラック・ダーンワーニッチャクル・崔聖玉・原田哲男・関光準 (1987) 『NAFL Institute 日本語教師養成通信講座日本語の音声 (II)』アルク

小河原義朗 (1997) 「発音矯正場面における学習者の発音と聴き取りの関係について」『日本

語教育』92号

申田真知子・城生佰太郎・築地伸美・松崎寛・劉銘傑（1995）「自然な日本語音声への効果的なアプローチ：プロソディグラフ」『日本語教育』86号

付録1 3音節中高型の形容詞：

青い 暑い 熱い 淡い 痛い うまい 多い 辛い 清い くさい 黒い こわい 寒い
白い すごい 狭い 高い だるい 近い 強い 長い 苦い にくい ぬるい のろい
早い 速い 低い ひどい 広い 深い 太い 古い 欲しい 細い まずい 安い
ゆるい 弱い 若い 悪い

（『新明解国語辞書』第四版によるものである。）

付録2 中高型の三音節上一・下一段動詞

褪^あせる 生きる 生ける 受ける 落ちる 掛ける 切れる 肥える 焦げる
媚びる 込める 避ける 裂ける 下げる 提げる 錆びる 覚める 冷める
強いる 占める 締める 閉める 饅える 過ぎる 拗ねる 擦れる ずれる
責める 攻める 逸れる 絶える 耐える 堪える 長ける 立てる 建てる
食べる 垂れる ちびる 尽きる 付ける 着ける 詰める 出来る 照れる
解ける 溶ける 取れる 萎える 投げる 舐める 嘗める 慣れる 馴れる
延びる 伸びる 述べる 生える 映える 剥げる 禿げる 恥じる 馳せる
果てる 跳ねる 撥ねる 晴れる ばれる 冷える 増える 更ける 老ける
伏せる 吼える 惚ける 暈ける 誉める 掘れる 混ぜる 交ぜる 見える
見せる 満ちる 漏れる 攀じる 分ける

（『新明解国語辞書』第四版によるものである。）

中国人日本語学習者によく見られるアクセントの問題点

Frequent accent problems observed in Chinese students when they learn Japanese.

You Dongxu

Summary:

When Chinese study Japanese, they have various problems in the accent because their native language influences. To evaluate this problem a seven items questionnaire was applied to Chinese students. The contents of this questionnaire compared how the accent of articles, verbs and compound nouns differentiates. The possible causes of these accent differences were evaluated and possible teaching methods are proposed.